

加齢などが原因で起きる変形性膝関節症を、関節の一部を人工関節に換える「人工膝関節部分置換」で治す例が増えている。膝関節全体を人工関節に置き換える手法に比べ傷口が小さく、

変形性膝関節症は、膝を長年使うことで、太ももの骨(大腿骨)とすねの骨(脛骨)との間でクッションの役割を果たす関節の軟骨がすり減り、大腿骨と脛骨がこすれあって痛む。高齢者に多い病気だ。歩行が困難になり、日常生活に支障が出る。

大阪府内に住む女性(76)は昨年6月末ごろから、歩行や正座の際、左膝に強い痛みを感じるようになった。近所の整形外科で治療を受けたが改善せず、半年後に高槻病院(大阪府高槻市)を受診した。

磁気共鳴画像(MRI)検査で、膝の関節組織の一部が壊れていることが分かり、今年1月上旬、同病院関節センター長の平中崇文さん(51)の執刀で、部分置換手術を受けた。

日本人に多い「O脚」では、膝関節の軟骨のうち、内もも側(内側)だけがすり減り、外側は正常である場合が少なくない。女性も内側がすり減り、手術では、軟骨が十分残

感染症の危険も抑えられるメリットがあるという。一方、技術を習得した医師はまだ少なく、普及をどう進めるかという課題も残る。

(原田信彦)

膝関節 部分置換で負担減

っている外側の骨は残し、内側のすり減った部分に樹脂製のペーシングを入れ、クッション役として代替させた。そして、痛みの原因となっていた、こすれあう大腿骨と脛骨のそれぞれの一部に金属製の部品をはめ込んだ。

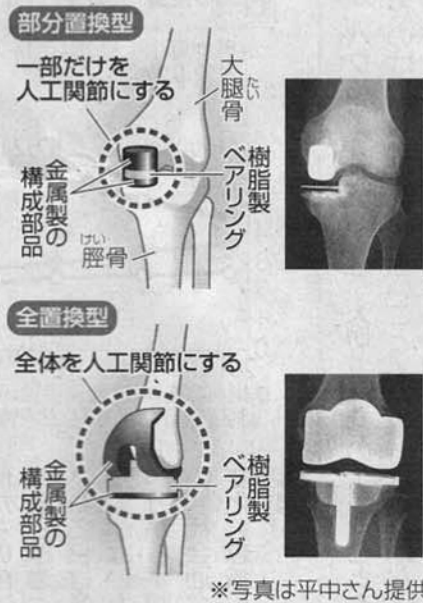
女性は、手術翌日から歩行リハビリを開始。入院期間は17日間で済んだ。「今は支障なく歩けます。正座と和式トイレは禁止ですが、それ以外は、元どおりの生活です」と喜んだ。

手術の傷口小さく

部分置換手術のメリットは、患者の体の負担が軽いことだ。手術でできる傷口は全置換に比べて小さく、出血量も100〜200ccと、全置換の半分以下に収まる。ことが多いという。部分置換は骨の多くの部分を残せるため、長年の使用で再び手術が必要になった際も、人工関節の交換がしやすい。

人工関節を使う治療の主流は、全置換手術だ。国内で年間に Rowe 行われる人工膝関節手術(2012年度で約7万5600件)の9割以上を占める。平中さんは、部分置換を開発した英オックスフォード大

人工膝関節の仕組み



※写真は平中さん提供

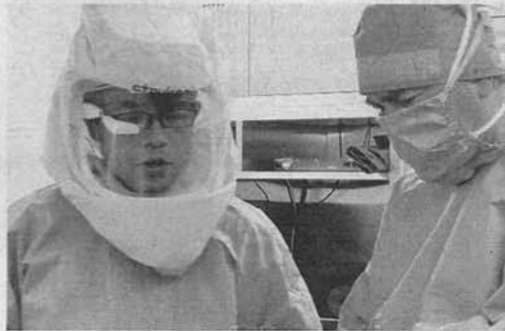
ネット中継に期待

部分置換の手術は全置換よりも細くなるため、医師が様々な症例を学ぶ必要がある。海外でも一般的な治療法には至っておらず、平中さんは「患者の負担を減らせるだけに、ぜひとも広めたい」という。

普及活動の一環として、平中さんらが期待するのは、インターネットを利用した手術の中継だ。

5月11日には高槻病院での手術を、京都や神戸、東京、韓国など国内外の医療機関にライブ中継する試みを行った。

この眼鏡型端末は、ウエストユニティス社(大阪市北区)が開発した「Infoclinker(インフォリンカー)」。昨年夏から、法人向けに販売している。



手術を生中継するためのウェアラブル端末を装着した平中さん(左)。右はネイレ教授(平中さん提供)

健康・医療

「くらし健康・医療」は日曜日に掲載します